2022年12月
WINTER
第6号

ENGAWA Project
iTOP, Kyushu Univ.

エンガワ

あなたとつながる、縁側系広報誌。

06

ENGAWA Project , from iTOP　maebaru.engawa@gmail.com

https://maebaruengawa.wixsite.com/engawa-gallery

エンガワクレープ

ゆうわ

まいまい

今年の11月5日、6日に4年ぶりに対面で開催された九大祭。
ENGAWAも「エンガワクレープ」というクレープの出店をすることに。
誰も何もわからない状態で始まる中、九大祭のメンバーとして活動したゆうわが九大祭を振り返る。

大変だった…準備

九大祭の説明会に参加。数十ページにわたる資料の読み込み。
出店書類、保健所提出書類などいくつもの書類の提出。
たびたび行われる試作会。クレープを作って失敗しては改良しての繰り返し。
九大祭に出店するまでにしなければならないことがたくさんありました。

ー九大祭準備ウラバナシー

初めの方の試作会では、
クレープの生地がぐちゃぐちゃで
見た目が悪く、
本当に商品として販売できるのか
不安でした。
なんでクレープに
しちゃったんだろう、、、
って何回も思いました。

ー九大祭当日ウラバナシー

前日は準備のために
夜な夜なみんなで作業したり、
材料が足りなくて
買い出しを頼んだり、
お昼時に隣の屋台にお客さんが来てるのに
うちには来てなくて焦ったり、、、
当日にならないとわからないことも多く
とにかく心配が尽きませんでした。

大反響！大忙しな当日

2日間合わせて約550個のクレープを販売。
お客さんからは「おいしい」と大好評で、中にはリピーターの方も！
私たちメンバーも「嬉しい忙しさだね」と屋台の中でクレープ作りに
奮闘していました。来店してくださった方々ありがとうございました！

みんなでやり遂げた九大祭

ENGAWAメンバーが協力してくれたおかげで
ENGAWAとしての九大祭は大成功でした！
明日からみんなクレープ屋さんでバイトでき
るんじゃないかなって思ったりもしてます笑
九大祭を通してより一層、ENGAWAのチーム
力が高まったと思いますし、終日手伝ってく
れたメンバーに感謝しかないです。
そして、みんなでいつもよりちょっと"豪華"
な打ち上げする という目標が叶ったので私は
大満足です！！！
また来年の"ENGAWAの出店もお楽しみにして
いてください！

column file06

前原掃除　九大サッカー部　何故？

01.前原掃除

みなさんは毎月１日に前原商店街を中心に
朝掃除が行われているのをご存じでしょうか？
私たちメンバーも参加しているのですが
実は近頃私たち以外の
若者たちがいるのです…！！

02.前原の地に現われた青年たち

若者たちの正体は、
九州大学サッカー部。
でも一体何故前原に？？
私たちは二号に渡ってその謎に迫ります。

03.地域とともにあるクラブ

真相への鍵は
彼らの目標にあります。
実は彼らは、
サッカーの取り組む面は
もちろんのこと、
地域貢献活動も
目指しているのです。

「地域に応援されるクラブにしたい」
そんな素敵な思いのもと、
前原の方々との交流を
深めています。

＼取材に応じて頂いたのはこのお三方！／
九州大学サッカー部のみなさんです。

波照間颯太さん

猿渡恵亮さん

佐藤大也さん

今年3月、前原にオープン。九大生が営む「書店」に迫る。

interviewed with
ALL BOOKS CONSIDERED

2022年3月、糸島市前原にオープンした、本や服、ZINEを扱う
四畳半の書店。九州大学の学生四人を中心に運営している。
前原を舞台に、自らのサブカルチャーを力強く発信し続けている。

――― ABC誕生の経緯を聞きたいです。

健太郎：本屋に昔から興味あって、大学入ってからも地元の好きな古本屋の雰囲気に思い焦がれてて。一階（糸島の顔が見える本屋さん）でもブース持ってたけど、30×30cmを小さく感じて不足してたんよ。
そんな時に2階空きましたって知らせが来て、同じ学部の服好きなメンバーに声かけて始まったかな。

――― ENGAWAはまちづくりを目的に活動しています。ABCも、まちづくりに寄与していると思いますがその点は意識してますか？

健太郎：「前原が元気になればABCに還元されてくから，前原に人増えてほしい」くらいの感情かな。
前原に必然性は感じてなくて、「俺はたまたまここに住んでて、地元は元気な方がいいよね」ていう風に思ってる。
ふーき：まちづくりって自然発生的に行われるもんじゃないのかなって思う。そこが目的だといつか手詰まりになるのかなーって。
かなと：確かに。まちづくりに体重が乗るときって、各々がやりたいことをやってるときかも。
ふーき：うん。その方がワクワクするよね。

今回対談してくださった、店長の
中田健太郎さんと、ふーきさん。

――― 個性的な本が多い印象ですが、どのように選書していますか？

健太郎：枝分かれをイメージしてみて欲しい。
参考文献とかTwitterから漁ることが多いと思う。
ふーき：一人の著者を深掘るのも、主張が浮き彫りになっていって面白いんだよね。
健太郎：あとこれは環境決定的な話で、店舗の狭さがゆえに「一点物」の書物が並んでる古着屋的なスタイルに行き着いたとも言えるかな。

――― 本の力とは？

ふーき：世の中に対して，漠然とイラついてモヤついた頭の中を，言葉の力でクリアにしてくれるんだよね。新しい問題に立ち向かう機会や力、「人間的，哲学的な成長」を与えてくれるものっていうのかな。
健太郎：本には、「タイトル」がある点が重要だと思ってる。この「タイトル」でこんなに書くコンテンツある？っていう驚きも含めて。
さらに言うと、「世界には言及すべきことが無数にあって」、「いかに隅々まで世界に言及できるか」っていう挑戦こそが、本なのかなって。
ふーき：「お前らもっと注目するとこあるだろ」ってね。

”本は、自分では処理できない感情を言葉に変えてくれて、「世界には言及すべきことがたくさんある」ということに気付かせてくれる”

編集後記

かなと

念願の、ABCさんとの対談が叶いました。彼らとENGAWAは似ていると思っていましたが、活動の「核」も含め、ほとんど全てが異なっていました。
彼らの本に対する「哲学」にも迫れた、良い時間でした。ありがとうございました！

あなたとつながる、縁側系広報誌。

縁側は古くから、外の空間と部屋との間にある曖昧な空間として日本家屋独自の
意匠となっています。ご近所さんを出迎え話し込んだり、天気のよい日に
日なたぼっこをしたりと、気軽な交流や憩いの場として親しまれています。
そのようななにかを大学生として作りたい―。
それはありふれた建物としての縁側でも、型にはまったSNSでもなく、
手紙のような手渡しされる広報誌なのではないかと考えました。
これはみなさまに見守っていただきたい、私たちのちょっとした挑戦です。

the editors　前田 佳凜 / 山根 春佳 / 喜多 悠 /吉村 宥和 /
矢野 叶翔 /里見 悠馬 /高畑 真衣

ENGAWA Project .

ENGAWA Project
from iTOP, Kyushu Univ.

九州大学公認地域活性化団体iTOPで活動しているプロジェクトのひとつ。「筑前前原を学生街に」を使命に、シェアハウスやイベントスペース、学生居酒屋の運営を行っている。

@ENGAWAproject.maebaru　@engawa_project　@AprojectEngaw